



寺門  
靜軒

著

痴談

上

4曾5  
71  
1

和装本



明僧5  
第71  
卷1



自序  
昔者秦政赫經自以為  
知而天下萬世以為痴  
天下萬世臣為癡然自  
以為知者懼仁義害於  
已也吁秦政知仁義存



靜軒齋

寺門靜軒著  
市川清流校

# 靜軒痴談

明治八年  
一月新刻

文昌堂發兌

于經而不知仁義存於  
天地間莫我之與人不可  
存焉也。經可焚矣。道可  
焚乎。是其所以為痴人  
也。予嘗謂有先秦焚書  
者。孔子黜墳典。斥九丘。

刪詩脩禮。豈不赫之乎。  
孟子塞楊墨之言。而開  
聖人之道。亦火之也。乃  
此則焚之者也。彼則不  
赫之者也。然而秦政亦  
不得不謂知者有焉。何

也彼意除六經外其言  
不仁義無害於已而世  
亦不仁義視之則其書  
舉委灰久矣由是言之  
謂之知人不亦可與後  
來著本隨出隨滅不待

火也。况乎戲本不過一  
管烟耳。嗟夫秦政焚書  
自以為知而天下万世  
以為痴如此者使秦政  
復起。豈煩祝融。然則靜  
軒可謂天下萬世之痴。

又痴者矣。是所以為癡談也。

得所老人書 鹽 隨

大... 帝... 禮... 天... 不... 在... 火... 也... 氏... 子... 燻... 本... 不... 毀... 一...

靜軒痴談目錄

卷之上

禮帳

七種ノ歌

惠方賽

餅

屠蘇

酒

演戲

助六ノ戲

散樂

餅屋ハ餅屋

甲櫃

武伎

鳥銃

御指

争于石火 目錄

坐陣

識半斷

蓮中

蘭丸三成

賣藥師

筒子

博奕

雲氣

飢饉

蝨

色欲

鬚

自鳴鐘

俳句

無用

英雄

不人情

滴血

婚禮ノ墨スリ

水針傳ノ編号

卷之下

角力

狐ノ話

觀世音

天狗

儒者

編笠

紫襪子

屎ノ神

木棉

墓相

夢

鬚鬚

不倒翁

讀古車記傳

靜軒痴談目錄終

卷之十	卷之九	卷之八	卷之七	卷之六	卷之五	卷之四	卷之三	卷之二	卷之一
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

靜軒痴談卷一

靜軒著

禮帳

古今談槩ニ、京師ノ節日ニハ主人ニテ出テ賀ス  
 ル故、夕、白紙簿ナラビニ筆硯ヲ凡ニ才キ、賀客  
 イタツテ其名ヲ書スト云又癸辛雜識ニ、節序交  
 賀ノ禮刺ヲ書シ、僕ノ徧ク投ゼシム、余ガ舅吳  
 四丈、性滑稽ナリ、節日ニアタリテ出スベキ僕ナ  
 ィ、門ノ首ニアツテ徘徊ス、會ク友人沈公子ノ僕  
 ガ刺ヲ送リ至ルニアフ、之ニ酒ヲ飲シメ、陰ニ已

ガ刺ト易ル、僕サトラズ、遂ニ去テアマ子ク吳ガ  
名フダヲ授ズ、他日吳丈沈氏ニアフテ、其刺一東  
ヲ出シ、相與ニ一笑スト云此等ノ様子、我が部下  
ノ禮帳ト同シ、予イトケナキ時、稱官京傳ガアラ  
ハセシ草雙紙ヲヨミシニ、拜年ノ刺ヲアルカズ  
ニ賦法アリ、其方ハ御行ニタノミテ、入家ノ門々  
ヘマキ散スニシト云ヲカシクテ笑ヒタリシガ、  
今ハ御行トイフモノ無クナリヌ、四五十年前ハ、  
寒天ニ法師ガ身ニ白衣ヲ着テ、手ニ鐸ヲナラシ  
細カナル繪紙ヲ撒シアリク、兜曹ガアトヲ追テ

拾タリシ、其後ニ半田稻荷ト唱フル僧ノ換様ガ  
御行ニ變ジタル遺風ナリシ、半田マタ變メ、鹿  
數名數ヲ結ビ、ヤソトコセ、ヨイヤサト言フ、歌  
舞セリ、其甚シキニ及テ、禁セラレシガ、今マタ乞  
人ノナストトハナリヌ、  
田七種ノ歌  
聞ク、正月八日七種ノハヤシノ詞ハ、殿ウツリト  
イフ草紙ニ、今宵八年ノ夜ナリ、イザトノバヤシ  
セシトテ、當殿ノトミヤニホシトミヤトゾ唱  
ヘケルト有テ、是レ新殿へ移レル年ノ終リニ祝



又唱ル詞ナリ、貴ク富ル、日本一也ト云ナリ、然バ、トノトリノ誤レルヨリ、後エワタラヌサキト詞ヲ添タルナラシカ、

恵方賽

閑田耕筆ニ、曆ノ恵方ハ兄方ナリ、甲乙ヲ兄弟トスルノ兄ナリ又或ハイフ、恵方ハ吉方ナリ、萬葉ニ墨吉ハ菜入神トヨメル例ナリト、其説ノ孰カ是ナルハ知子ド、小人ハ恵ヲ懐フト云トホリ、後人ハ恵方マ井リハ、タニ恵ヲ願フ慾ブカキヨリ、ノナルニ、子弱冠ナリシ頃識人ナリシ五福

亭染丸トイフ狂歌師ガ、傾城ノ吉書始ト云題ヲ為ニナル客ヲエハウニ筆トリテ、間夫ノ名ガキヲ書初ニセント、ヨメリ、能ソノ情ヲ寫セリ、

餅

安藝守基明嬰鬼ノ時、正月餅ヲ戴クノ間少納言入テ祝言ストイフコト、鹽尻集ニアルヨシ、皇朝モ子ヲイタバクコトハ古ヨリノ風俗トキク、潤ヲ好マヌ老人ハ、餅ヲ食フテモ老ヲ養フベシ、但シ老人ノ咽喉ハ、モ子ノツキ易キモノナリ、モシ咽ニツキシ時ハ、鐵醬ヲ飲ガ妙方ナリト云、

屠蘇

藝林伐山ニ屠蘇ハ本草ノ名ナリ也ヲ屋上ニ工  
ガク後クサノ名ニ因テ屋ニナツク後人マ夕屋  
ノ名ヲ借テ酒ニ名ク元日ノ屠蘇酒コレナリ漢  
土ニテモ屠蘇ハ年弱キモノヨリ盃ヲ舉ルコト  
東坡ガ詩ニ見ユ

酒

禹ノ旨酒ヲ惡ミシハ少年ノ害ヲ惹シテ恐レ  
シナルベシ天ノ美祿百藥ノ長ト稱セシハ老人  
ヲ養フニ出ルナラシ然バ老人ハ飲ハク少年ハ

飲マカヨシ飲トモ温克ニメ平生ニカハラズ酒  
ノ困ヲナサバハ真ノ豪傑ニメ世ニ希ナルモ  
ノナリ少年ノ治遊カ爭論ヲ起スハ多クハ酒ガ  
媒ヲナスナリ殊ニ小胆ナル者酔トキハ驕慢ニ  
ナリテ儀ヲ失ヒ世ヲ罵リ人ヲ詈ル詩ニ酔ザル  
者反テ恥ルト云ヲ免シズ戒メサルベケンヤ程  
洵可ガ酒警ニ酒ハ以テ人ノ歡ヲ合スガ為ナリ  
酒ヲ使ヒ座ヲ罵ルハ晏元獻公ガイフ所ノ合開  
ナリト合開ノ字オモシロシ乃者夕マク坊園酒  
訓八則ヲ讀シニ曰風ニ臨テ調ヲ寄七月ニ對メ

高ク歌フ巧ヲ窮メ奇ヲ搜リ、杯ヲ啣テ雅謔ナル  
 ヲ、是ヲ清酒トイフ。珍羞羅列シ、燈火カ、ヤキ、航  
 籌錯落シ、笙歌雜遒ス、是ヲ濃酒トイフ。親朋ハ  
 ハリ集リ、雅俗ノ分ナク、四座喧シク呼ビ、市井才  
 ホシ、是ヲ濁酒トイフ。樽殘シ、燭冷カニ、僮僕蕭然  
 タルニ、盞ヲ舉テ長談シ、飲ス散ゼズ、是ヲ淡酒ト  
 イフ。筵ヲ肆于席ヲ設、久侍從雲ノ如ク、博帶裁冠、  
 ウヤクシウノ詐リ多キ、是ヲ苦酒ト云。紅袖偎歌、  
 青衣爵ヲ進メ、軟玉温香ニメ、淺ク斟ニ、低ク唱ス、  
 是ヲ甜酒ト云。勉強ノ樽ヲ開キ、玉杏色多久留ラ

ント欲メ味ナク、去ント欲ノ能ハズ、是ヲ酸酒ト  
 イフ。苛政森嚴、五官並ビ用ヒ、心ヲ驚シ、目ヲ注キ  
 草木ニ十兵ナル、是ヲ辣酒トイフ。右八則ノ中  
 濁淡、苦辣等ノ厭フベキハ、固ナリ、甜酒ハ欲スル  
 モ得テ所ニアラズ、濃酒ハ間アツカルトモアル  
 ド亦煩ハシ、唯清酒ハ得ル所ニ、又實ニヨシトス  
 レド、老ヲヤシクシテハ、猶獨酌ニシクハナシ、予  
 ハ獨酌ヲ最上乗トシ、陶淵明ハ、壺觴ヲ引テ庭柯  
 ヲ顧シ、毛獨酌ナリ、蘇子美ハ、漢書ヲ讀テ酒ノ下  
 物ニセシ、毛獨酌ナリ、王敦ハ、歌ヲウタフテ玉唾

壺ヲ夕、キ碎シモ獨酌ナリ、畢卓ガ酒ヲヌス  
 テ飲シモ獨酌ナリ、獨酌ノ風味推シルベシ、梅聖  
 俞ガ俗客ト共ニ酌シヨリハ、老婆ト對酌スルカ  
 好ト云ケレドモ、予ヲ以テ之ヲ觀バ、老婆モ獨  
 ツラハレト思ハル、周禮ニ酒正、四飲之物ヲ辨ス  
 ニ曰、醫トアリ、醫ハ毛酒ノ名ナリ、酒ノ入ヲ養  
 フヲ知ベシ、生ヲ養フ酒ヲ以テ身ヲ害シ事ヲ敗  
 ルハ、愚ノ至ト云ス、又、韓愈ガ詩ニ、酒ハ中  
 ノ四飲也、演戲、五音、年、酒、用、之、次、之、謂、之、爲、五、戒、也  
 漢土ニ雜劇トテ、絃、唱、小、說、ノ、類、ハ、唐、宋、ヨリ、既、ニ

アリ、場ニ上ツテ搬演スルハ、元ノ世ニ起ルト云  
 生、夕チヤク、或ハ戲頭トイヒ、或ハ末泥トイフ、引  
 戲ハニマイメノ夕チヤクナリ、生トイフハ曲ノ  
 熟サシトイフ欲スル故ニ、及テ名テ生トイフ  
 旦又狐裘ト正旦ハ、夕テオヤマ、小旦副旦ハ、ニナ娘カ  
 夕ナリ、旦トハ婦ハ夜ニ宜キ故ニ、及テ名テ旦ト  
 イフ、又旦ハアサ明ントメ未ダアケズ、曉色未ダ  
 分レザルノ時ユエニ、男ニメ女ニ粧フ暗昧未分  
 ノ意ナリトモ云、  
 淨ダウケヤクケガシ醜キ故ニ、及テ淨トイフ、

丑カクカクヤク、其陋ロウナルヲ云、又賀頭カウトイフ、按、正韻

音醜義亦通

未ミアラゴトシ、外末ガイマハオヤチガタナリ、其始メ

出ル故ニ、反テ名テ未トイフ、

祝允明シユンメイガ猥談ウヱタンニ、生淨セイジヨウ旦末タンマ丑等ウウトウノ名ハ其事ヲ反

シテ稱スルナリ、云々、今ノ所謂市語シゴナリ、生ハ即

男子、旦ヲ粧旦シヤウタン色トイヒ、淨ジヨウヲ淨鬼ジヨウキトイヒ、未ヲ未

尼トイフ、狐ハ即官人クワンジン、其土音チノオンノミ何ノ義理カコ

シテラシム、

今漢カンノシバ井ノ語シバノゴヲ、江戸ノ戲シニヒキアテ、イ

ハ、開場カイジョウハホツタン、定場テイジョウハ家門ケカドハダイジヨ

子シ、沖場ウキジョウハフタツメ、白シラハコウジヤウセリフ賓

白シラモセリス、腔板クウイタハ、キヲイレル、脚色キヤクシキハシクミヲ

ムフ、一齣イツクハヒトマク、零齣レイクハヒツカヘシ、ハヤマ

久キウ小收コウシウ然ゼンハ、ナカイリ犬收イヌシウ然ゼンハ、オホヅメ收場シウジョウモ

オホヅメ結果ケツカ、全上ゼンジョウ兩人相對リウジンサウタイスルヲ賓ト云カケア

ヒナリ、一人自ラ説クヲ白ト云、

南宋市肆記ナンソウシシキニ或ハ路伎ロキアリ、均欄クワンランニイラス、開シ

久キウ潤ジュンキ處キニ在テ場ジョウヲナス、之ヲ打野呵ダノヤカト云、是又

藝ゲイノ次ナル者ナリ、此ハ江戸ノ宮廷ミヤテイ居イニアタル

ベシ

開元譜一 倡優ノ社南ニ居ル者ヲ呼テ社南氏ト  
ナシ北ニ居ル者ヲヨンデ社北氏トナス云云按  
ニ既ニ社トイフトキハ優人ノ居ル坊ヲ別ニソ  
良民ト雜居セシメ又トエ今江戸モ倡ヲソ  
良民トマシハリ居シメズ清濁貴賤ヲ別ソヨロ  
シト謂ベシ

助六ノ戯

予嘗テ助六ノ戯ヲミテ文章ノ趣ニ自然ト同  
ト思ヒシトアリシ初メ助六ガ朝貞煎平ノ頭へ

七

一碗ノ蕎麥麵ヲカブセルハ後ニ意休ノ頭へ履ヲ  
イタバカス前オキナルベシ文章家ノ法ニ伏線  
後案ナドハイフニアタリテ作者ノ意ナキニハ  
非ルベシ又意休ガハジメ大ニ豪ヲ撒セシニ助  
六ニ遇テ一頓セラシ又揚卷ガ調言ニアフト更  
ニ頓カル助六ハ意休ニ向テ氣ヲ吐キ白酒賣ノ  
イケンニ屈シ又揚卷ガ口説ニ屈ス揚卷モマタ  
意休ニ對テ氣ヲ吐キ助六ニアフト却テ問ス是  
文ノ起伏頓挫ニアタルベシ又助六ガ揚卷ニ別  
シテ歸ントスルトキ幾度カ歸ルト云テ躊躇

シ、勢イキガヒキハマツテ、壽命シユメイノ毒ドクダトイヒ放ナチ、思オモヒキ  
ツテ歸カエラントスルヲ、揚ホウ卷クワンカ呼コト留トドル所トコロハ、文章ブツキョウニ  
イフ、山ヤマキハマツテ水ミヅイヅルナド云イハト同ドウジカル  
ベシ、反オモ覆カエ趣オモヲトツテ、善ヨクク景ケイヲ粧カサヒ情ジョウヲ寫カキセリ  
ト云イハベシ、但タダシ文章ブツキョウナドハ、道ミチニ志ココロス者モノノ意イヲオ  
ク所トコロニアラズ、然シカレドモ道ミチアル者モノノ語コトハ、自然シゼンニ  
章シヤウヲナス、其實ジツハ文ブンニ法ホウナク、道ミチアル者モノノ語コトハ、自然シゼンニ  
ナス故ユヘナリ、儒者ニウシャノ文法ブンポフヲ説トクハ、徒タラニ末マタヲ論ロンズル  
ノ云イハ、東坡トウパカスニ文ブンヲ教ケウフルニ、論語ロンコノ辭達ジダツノヤ  
ムヲ主シユトセヨトイヒシト云イハ誠マコトニシカリ、

助タケ六ロクカ出イ場バウハ河東カトウ曲キョクヲ用ヨウフ、但タダシ座ザニヨリテ例レイ魯生ロセイ氏シ  
ガ話ワタシニ、凡ソレソシバ井イニ傭ヨウル、者モノ値チヲ受ウケザルハナ  
シ、獨ドク吾曹ゴソウノヤトハル、ハ、昔イマヨリ例レイメ我ガヨリ資シ  
ヲ掬クル、故ユヘニ千金センギンノ優ユウモ、我ガ社シャニ對タイメハ慢氣マンキヲ  
撒サスルヲ得エズトイヘリ、予ヨ甚シダ其ソノ古風コフウヲ失ウシハ  
ザルニ感カンセリ、又マタ壽阿彌シユアマヒ法師ホフシノ話ワタシニ、昔イマハ劇場ゲキヤウノ  
權作者ケンサクシャニ屬ツクメ、倡優オウユウツ、シシテ其ソノ指麾シシヲ受ウケタリ、  
故ユヘニ狂言キヤウゲンヲ肆シスル時トキハ、作者サクシャガ上席ジョウセキニ坐イメ、酒肴シユコウ  
ヲ前マエニツテ子コ盃ハイヲ把テテ倡オウヲ頭使カウシス、其ソノ態度タイドヨケ  
レハ大オホニ稱譽ショウヨシ、アシケシバ口クチヲ極キョクテ之レヲ罵ノノル

優ハ氣ヲ屏テ唯々タリ、然ルニ今ハ權ヲ倡ニ奪  
ハシ、作者カヘツテ其指麾ヲウケ強メテ其意ニ  
從フトイフ、嗚呼風俗ノ變此ヲ以テ推スベシ、獨  
倡ノミナランヤ、  
或ノ話ニ、某ノ儒先生アリ、弟子等先生ヲナグサ  
メントテ、一日戯場ヘ誘ヒ往シ、哀シキ狂言ニ  
アフト師弟トモニ落涙セリ、歸テ後弟子ヲ言、我  
輩ノ涙セシハ、心ヲ奪ル、ニヨシド、先生モ亦浩  
然ノ氣ヲ動セシハ、何如ナルト疑ヒ之ヲ質ス  
ニ、先生曰、我涙ハ二三子ノ涙ト異ナリ、予ハ哀シ

キ真似ニ感ゼシニアラズ、倡優等ガ丈夫ニ生シ  
ナガラ、女子ノマ子ノ生ヲ送ルヲ憐ト思ヒ、落涙  
セリトイフ弟子等始テ先生ノ涙ニ感服セリト  
云、予思フニ、男ガ女ノマ子スルハ、戯場ノ常ナリ  
非禮ヲ見ルコトナカレトイフ天觀サルニ如ハ  
ナカルベシ、且、女ノマ子スルハ、古ノ蘓秦張儀  
ヲ初トメ、妾婦ノ道ヲナス者ハ皆是ナリ、何ゾヒ  
トリ倡ヲ責レヤ、

散樂

嘗テ觀世大夫ノ道成寺ノ舞ヲ見シニ、己ニ鯨鐘



二入<sup>イラ</sup>トスルニ及<sup>イ</sup>デハ諺<sup>ワザ</sup>ノ曲節<sup>キョクセツ</sup>モナク唯<sup>タダ</sup>鼓<sup>ツヅミ</sup>ノ  
拍子<sup>ヒタツシ</sup>ノミニテ舞踏<sup>マフ</sup>シ幾回<sup>イクタク</sup>カ入<sup>イ</sup>ントメハ入<sup>イ</sup>ヤラ  
又<sup>マタ</sup>其<sup>ソノ</sup>フセイ優<sup>ユウ</sup>ニメ態<sup>タイ</sup>ヲキハメ、婉<sup>ワン</sup>ニメ情<sup>セイ</sup>アツマ  
ル予<sup>ヨ</sup>此<sup>コノ</sup>ニ於<sup>オ</sup>テ詩<sup>シ</sup>ノ境<sup>キョウ</sup>ヲ想<sup>オモ</sup>ヒ合<sup>ア</sup>セリ、詩經<sup>シキョウ</sup>ノ采芣<sup>サイフ</sup>  
ノ篇<sup>ヘン</sup>ナドハ古人<sup>コジン</sup>ノイヘル如<sup>ノ</sup>ク自然<sup>シゼン</sup>ニ太平<sup>タイヘイ</sup>ノ氣<sup>キ</sup>  
象<sup>シヤウ</sup>ヲ帶<sup>オビ</sup>ル詞<sup>シ</sup>タクミナラズシテ味<sup>ミ</sup>アマリアリ、主  
意<sup>シヨウ</sup>モナキヤウナレド限<sup>リミ</sup>ナキ情致<sup>セイシ</sup>ヲ窮<sup>キウ</sup>ム、離騷<sup>リサウ</sup>ノ  
天問<sup>テンモン</sup>ナドハ全<sup>ゼン</sup>ク詩<sup>シ</sup>ノ大東<sup>ダイトウ</sup>ヨリ出<sup>イ</sup>タルナラズ聞<sup>ク</sup>  
今<sup>イマ</sup>ニ至<sup>イ</sup>テ古<sup>コ</sup>ヲ失<sup>シ</sup>ハザルモノハ世間<sup>セカン</sup>ニタゞ散樂<sup>サンラク</sup>  
ノミナリト、誠<sup>マコト</sup>ニシカリ演戲<sup>エンキ</sup>モ古<sup>コ</sup>ノハ忠孝<sup>チュウコウ</sup>ノ道<sup>ミチ</sup>

ヲ寫<sup>カク</sup>メ、勸善懲惡<sup>コンゼンテイアク</sup>ノ為<sup>タメ</sup>ナリシニ、歳<sup>サイ</sup>ヲ逐<sup>オク</sup>テ其<sup>ソノ</sup>サマ  
カハ制<sup>セイ</sup>、今<sup>イマ</sup>ノハ畏<sup>オソ</sup>敷<sup>シ</sup>ナルハ甚<sup>シ</sup>シ、淫<sup>イン</sup>ヲ導<sup>オウ</sup>ノ具<sup>ク</sup>トハ  
ナレリ、是<sup>コト</sup>亦<sup>モト</sup>嗚呼<sup>ウフ</sup>ナリ、  
餅屋<sup>ヘンヤ</sup>ハ餅屋<sup>ヘンヤ</sup>  
霏雪錄<sup>ヒセツロク</sup>ニ、骨董<sup>コウドウ</sup>ハ乃<sup>ナラ</sup>チ方言<sup>フヘンゲン</sup>ナリ、初<sup>ハジメ</sup>ヨリ定<sup>サダメ</sup>レル字<sup>ジ</sup>  
ナシ、東坡<sup>トウパ</sup>カツテ骨董<sup>コウドウ</sup>羹<sup>カウ</sup>ヲ作<sup>サセ</sup>ルニ、此<sup>コノ</sup>二字<sup>ニジジ</sup>ヲ用<sup>ヨウ</sup>ス  
晦菴<sup>ヘイサン</sup>語類<sup>ゴルイ</sup>ニハ、汨董<sup>コウドウ</sup>ニ作<sup>サセ</sup>ル云<sup>イハ</sup>ヒアル貧<sup>ヒン</sup>シキ骨董<sup>コウドウ</sup>  
家肆<sup>カセツ</sup>ニ、貨物<sup>カモノ</sup>少<sup>シ</sup>キ故<sup>ユヘ</sup>、カタテ業<sup>ギヤク</sup>ニ金<sup>キン</sup>鐔<sup>ツツ</sup>燒<sup>ヤキ</sup>或<sup>マタ</sup>ハ小麥<sup>コウマク</sup>ヲ製<sup>セイ</sup>  
テアキナス或<sup>マタ</sup>日<sup>ヒ</sup>一<sup>イツ</sup>士人<sup>シジン</sup>キタリテ、貨<sup>カモノ</sup>ヲミルツイ  
テニ、其<sup>ソノ</sup>值<sup>チ</sup>ヲ問<sup>ト</sup>フ、主人<sup>シユジン</sup>コタヘテ、一箇<sup>イツクワン</sup>ニ錢<sup>セン</sup>ツ、ナ

リトイヘバ、士子ギツテ一文ニマケヨトイフ、  
註  
謝テ、是ハ何方ニテモ、二文が通例ナリト言ケレ  
バ、然ラハ真ノ餅屋ニテ買ント云テ去シトイフ、  
是諺ニイハユル、餅屋ハ餅ヤガヨキナリ、論語ニ  
樊遲ガ農ヲ學バント請タリシニ、孔子ガ我ハ老  
農ニシカズトノ玉ヒシモ亦是ナリ、稼穡ノ業ハ  
農ニ謀ルベク賣買ノ事ハ、滴ニ問ベク文武ノ道  
ハ士大夫ニキクベシ、但シ太平久シケレバ、自然  
ト士流モ文武ニ怠ルモノアリ、昔シソノ弊ヲ誠  
メ矯メシ時、士大夫驟ニ劍術ヲハジメ素讀ヲハ

ジメ、刃ガ長クナリテ、刃鍛冶ガイソガシク、逐々  
餅ヤガ餅ヤニナリシトキ、久因テ思フニ、鍛冶ヲ  
カゾト訓ズルヲ、和名抄ニハ音ノ誤リトアレド、  
古事紀傳ニ本居氏ハカゾト讀ガヨシトイヘリ、  
神通氏ハ鍛冶ノ訓ハカトウチノ轉語カヌチ  
ニテ、ナヲヌトイフハ、ナエヌチノ通音、ウチヲ縮  
メテチト云ハ、アイウエオノ音上ニ加ルハ多ク  
省ケリ、又天ノ目一ツノ神ヲ鍛冶ノ祖トスル故  
ニ、一眼ノ人ヲカンチト云、カヌチノ轉語ナリ、江  
戸ニテハ、メツカチト云、コレ亦カヌチノ再轉也

因テ憶フコ、忠臣藏裏表トイヘル演戲ニ、平右衛門カ急脚ノ打扮ニテ、鹽治ト書シ酒店ノ障子ヲ言テ、意ハカハレド、鹽治ハ工シヤトイフ、白アリ文字ハカハレド、言ベキ所ス意ハカハレド、ハ、作者治治ノ別テ辨セヌカ、但シ故意トシカ云テ、一段心ヲ用ヒシナリシヤ、

甲櫃

本邦ニテ、甲ビツノ内へ春畫ヲイヒオクテ、古例ナリト言ツタフルハ、何ノ登徒子ニ起リシヤ、例ナド、言ハ必ズナキ道理ナルベシ、路史ニ士人

アリ藏書甚クオホシ、筒ゴトニ必ズ春宮一冊ヲオク人コシテ問フニ答テ曰、聚書多ク火ヲ惹ク此物ヨク火災ヲ壓スルナリト此亦登徒家ノ醜ヲ掩フ假言ニテ、甲櫃ト書筒トハ異ナレドモ、笑畫ノワラフヘキハ並ニオナジ、或士カ甲冑ヲ典却セシニ急ニ君命ニヨツテ旅行スルニツキ、甲櫃ノ内へ、櫃盆ト槌木トヲ納テ發行セシニ、道中ニテ傭役ガ誤テ之ヲトリオトシ、盆木ガ轉出セリ、後夫ガ笑テ狸ガ茶釜ニ化タル話ハキケド、鑑ガ櫃盆ニ變タルコト古今稀ナラレト言ケシハ

士カ強顔ニナリテ是ハ納オキタル春宮本ノ變  
化セシナラント云ヒシトイヌ

武伎

文武ハ車輪ノゴトシ凡ソ士タルモ人偏廢スベ  
カラズメ武術ノ中ニ於テ弓馬ハ又車輪ノ如シ  
弓ヲ能スモ馬ヲ善セザレバ人ニ足ナキカゴ  
トク馬ニヨク乗モ弓ヲ引コトアタハザシバ人  
ニ手ナキガ如シ然バ左ノ手ヲ弓手トイヒ右  
ノ手ヲ馬手トイフ是弓馬ノ二ツハ士ノ身ニ具  
足スヘキノ道理ナリ故ニ兵法ニ馬ハ士ノ足ナ

リト云フ或ハ聞ク治世ノ馬ノ乗ヤウハ桐子ト  
リニ天軍國ノ馬ノ歩トハ異ナリ戰場ニテハ馬  
ノ天性ニ順ヒ一足トビニ歩マスル馬術家コト  
ヲ野足トイヒ或ハ櫻狩ノアシナミトイフ軍中  
ハモトヨリ猪狩犬追物ニテモ野足ナラデハ働  
キエス太刀打ハ右ニ受テ弓ト槍トハ左ニ受ル  
ヲ法トスレド敵モ亦勝手ニウケントスレバ平  
生ノ的ヲ射ル如キヲエズ槍モ馬上ニテハ柄ノ  
半ヲ執テ馬ニ和メ突出スヲ法トナス敵ノ来ル  
モ獸ノ来ルモ前後左右ノ定リナケレバ今ノ三

七モノ、曲馬ノ如クニ、身ヲ自由ニセザシバ、我  
ガ敵ヲウクル為ノミナラズ、敵ノ矢ヲサケ、敵ノ  
槍ヲサクルヲ能ハズ、然シバ馬ノ天性ノアユ云  
ニ任セザシバ身ノ自在ヲエズ、故ニ野馬ニスル  
ニハ、轡ノトリヤウ、鞍ノオキヤウ、鏡ノスエカク  
悉ク常ニカハルヨシ、然トクシク拘子トリニ慣  
タル馬ハ、急ニハモトノ歩ヲ出ヌヨク、然バ馬ニ  
カギラズ、何モシカルハケレバ、軍國ノ用ヲ治世  
ト講スベキナリ、蕉廬氏ノ話ニ、加茂ノ驍馬ハ  
野馬ヲ用テ、其歩一足飛ナリト、軍國ノ風ヲ今ニ

存スル、珍ラシト云ベシ、  
鳥銃

世ノ移リユク、今ハ鳥銃オコナハシテ、弓矢ノ威  
ハ第二義トナリ、又談餘叢考ニ、軍中ニ火器ヲ用  
ル、古ステニ之アリ、周官ニ火射、枉矢ノ屬ステ  
ニ、其端ヲハジム、所謂礮ナル者ハ、皆機ヲ以テ石  
ヲ發ス、范蠡ガ兵法ニ、飛石重サ十二斤、機法ヲナ  
シ行コト三百歩、三國志ニ、曹操霹靂車ヲナシ、袁  
紹ガ高槽ヲ破ル、元ノ兵汴ヲ攻ルニ、金ノ龍德宮  
砲石ヲ造リ、良岳ノ石ヲ取テ之ヲ為ス、其狀圓ノ

燈毬ノ如シ、元ノ兵ノ礮ヲ用ルハ、大礮ヲ破リ攢  
竹ヲ用テ砲トナス、火砲ハ實ニ南宋金元ノ間ニ  
オコル、鳥槍ハ明ノ嘉靖中ニ起ル云々七修類藁  
ニ嘉靖ノ閑倭内地ニ入ル擒ル、者アリ並ニ其  
銃ヲエタリ、遂ニ倭人ヲノ此ヲ教ヘシメ、其法ヲ  
ツタヒ唐順之ガ疎ニ云國初夕ハ神機火槍ノ一  
種ノ三佛郎機ノ子母砲鳥嘴銃ニナ後ニ出ツ、鳥  
銃モツトモ猛利ナリ、銅鉄ヲ以テ管トナシ、木橐  
コシヲ兼々中ニ鉛彈ヲ貯ヘ、其點放ノ法、両手ニ  
テ管ヲモチ、手ヲ動ズノ藥線ヲ用テ、其管ノ背ニ

二鼻ヲ施シ、目ヲ以鼻ニ對ス、擊ント欲スハ、着  
セザルハナシ、倭人コシヲ用テ其巧ヲ肆ニ、又中  
國ノ人ニ之ヲ習フ、續通考ニ參將戚繼光イテ昔ニ  
衛庫ニ於テ鳥銃ヲシル、倭變イマダ作テザル時  
モトヨリ有所ノモノナリ、震澤紀ニ、文皇北征ノ  
時初メテ神槍ヲ得タリ、然ドモ明ノ制凡ク火器  
ハ内府ノ兵仗局ニ在テ掌管ス、外ニアツテ、成造  
スルヲ許サズ、故ニ業平日久メ、之ヲ用ル  
月ヲ知ズ、直ニ嘉靖中ニ至テ、倭人中國ニ入り、又  
其傳ヲウルノ区、此等ニヨリテ觀バ、鳥銃ノ起ハ

和漢大槩方ナシ時代ニメ其習ヒ用ルハ我が  
邦ノカタ先ニアリ且我が勇ナルハ漢ニ勝レリ  
ト云フ明史藁ニ帝嘗テ倭ヲ禦ク策ヲ訪フ鳴謙  
曰倭海上ヨリ来ルトキハ海上ニテフセガシノ  
云地ノ遠近ヲ量テ衛所ヲオキ陸ニ兵ヲアツメ  
水ヲ戰艦ヲ具ヘテ其間ニマシヘ置バ倭ツヒニ  
入ルヲ得ル所ナレ入モ亦ウル所ナレ若コレ  
ヲ縦テ岸ニ登ラシムレハ制レガタレ又唐順之  
ガ倭ヲフセグ策ニモ之ヲ海外ニ截ベシハ大ツ  
テ陸ニ登ラシムレバ内地ニ禍ヲウクト云

然レバ我國ノ勇武ハ萬國ニスグルハ知ベシ  
萬一夷寇アルトモ必ス火器ヲ恃マズノ可ナル  
ベシ  
老學菴筆記ニ李允則ナル者滄州ニ依タリ虜来  
テ城ヲ圍ム城中ニ礮石ナレ乃チ水ヲ鑿テ礮ト  
ナス又陳規ガ安州ヲ守ルニ泥ヲ以テ礮トナス  
トモアリ然ラバ輕クトモ事ニ臨ンデ用ヲナス  
ヲ知ルベシ且勝敗ハ將帥ノ處置イカンニアラ  
ン今外夷ノ使ヲ礮ハ何如ナル堅城デモ碎クト  
云ニ海國兵談ニハ外國ノ様子ヲ聞テ專ラ城ヲ

堅固ニスルコトヲ説久其頃ハ夷モ今ノ火ニ巧ナ  
ルホドハ非ザリシトエタリ城ノミヲ恃ニ  
スルハ偏ナリ信玄氏ノ如ク城ヲ恃マザルモ亦  
偏ナルベシ要スルニ兵ハ人心ヲ恃ムガ第一也  
孟子曰斯ノ城ヲ築テ民一之ヲ守リ死ヲ效ノ民  
サズンバ是レ益ベシ孔子曰兵スツベシ食ス  
ツベシ民ニ信ナクレバ立ズト誠ニ然リ夷礮ガ  
烈シトイフトモ人心ヲ碎クハ得ザルベシ  
赤松氏ノ海防辯ニ彈丸ハ代ル物種々有ドモ藥  
ニ代ル物ハナシ焰硝ハ年ヲ經ザレバ生ゼズ此

物人カニテ半年一年ノ内ニ作リイダスベキニ  
非ズ年ヲ歷テ漸クナル焰硝又空ク失フハ愚ノ  
至ナリ今ノ世ニイタリテハ人カヲ以テ焰硝ヲ  
半年ノウチニ製シ出ス此ニ準ソ萬事新ニナリ  
コ久時運ノ變化ゾ窮ナキ  
士大夫ノ世ニ於ル茶儀奕碁擲毬蹴鞠等ノ伎ハ  
知モ知ラヌニ賢ルベシ文武ノ二道ニ於テ人  
中ニテ指ヲ嚙テ引コムハ口惜キコナラスコト淮  
南子ノ周鼎著倭ノ注ニ倭ハ堯ノ時ノ巧工ナリ

靜軒齋抄卷一  
十八



周ニ及テ昂カミヲイルニ倭ヤマトカ像ガクヲホリツク其指ササヲ  
啣クハシム、譬タトヘバ倭ヤマトヲノ有アシムルモ、此上ニハ出イベカ  
ラズ、當タトヘニ指ササヲ嚙クハベシト云々此方ニテ指ササヲ啣クハル  
ト云俗言ハ是ニイヅルカ、指ササニ就ツキテ憶オモヒ出イセシ  
トアリ、草紙本ノ人物ノキリアフ圖ニカクテ握ニギシ  
手テヌ多ク食指シヨウシヲハ子テカク故予幼時ニ此ハ形  
容ヨウヲトリシニテ、劍術ノ法ニハアラシト思ヒシ  
ガ稍長ノ學マカシ知新流ノ劍法ハ、食指シヨウシヲハ子テツ  
カフ故世ニイフ畫エソラゴトニテモ無リシト思  
ヒアタリシ、但シ諸流シヨウリウカホクハ食指シヨウシヲハ子ズ、今

其理リヲ考カウルニ指ササ緊キムノ掌テ空カラシク、圓活エンカクヲ主メトスレ  
バ、筆法ヒツポフト同ドウシク、食指シヨウシヲハ子ルヲ善ヨシトセシカ、  
聞キク、槍ヤハ楠氏ナハシニ起オリ、長柄ナガカハ武田氏タケダシニ創シマリ、坐  
陣マモ亦武田氏タケダシヨリ始ハジルト云、果ハタシ然シカバ此方ノ坐  
陣マハイト晩オソクキナリシ、左傳サダツマニ楚人ソノノ北門キタカドニ  
坐マス、之ノヲ山下ヤマノニ覆フク杜注トニハ、坐マハ猶守ナホルカ如シ  
トアシ、下補注シモニハ、尉繚子イリウシヲ引ヒテ、坐陣マトハ漢  
土ツチノ坐陣マハ古コキナリシ、竹把タケモ亦武田氏タケダシノ臣  
米倉基ヤシノ制セイ造ゾウナリトイフ、漢カンニテハ五代史ゴダイシニ見

ユル竹龍ナルモノ是ナルベシ毛詩ノ竹極史記  
棘矜ニナ積竹ヲ以テ之ヲ釋ス白ヲ削サツテ  
其青キ所ヲ取テ之ヲ合ス即チ今ノ措竹ノ法ナ  
リト升菴ノ集ニ云ユ此マタ竹束ト云テ可ナラ  
或ル所ノ賣ト者以招牌ヲ吉凶半斷ト記シテ  
ヲ見テ初メハ可笑オモヒシガ再ビ考テミレバ  
判斷ヨリハ半斷ガ言シト思ヘリ何如トイハシ  
其諺ニ中ルモ八卦アタラヌモ八卦ト言ゴトク

大槩ハ半斷ナルベシ且ツ一身ノ進退ヲ十六錢  
カ三十二文ニテ古ヘハ半斷ニテモ賤ト云リ  
漢土ノ古ヘハ筮ヲ用ヒシハ國家ノ大事ノニ  
ノ容易ナルコトニハ用ヒズ故ニ書經ニ卿從ヒ  
筮從ヲトアリテト筮ヲ官人ノ部ニイル禮記ニ  
民ノ疑ヲ定ルトアルガト筮ノ本義ニテ聖人ガ  
神道ヲ設テ民ヲ治ル一ツノ器ナリ易ハモトト  
筮ノ書ニアラズト筮ハツケタリナレハ占ハ半  
斷ニテヨカルベシ實ノ占トイフハ平生易ノ理  
ヲ研究ノ事ニ臨ニテ惑ザルヤウニスルガ占ナ

リ然ル故ニ孔子モ五十ニメ易ヲ學ビバ大ナル  
過ナカラシトノタマヘリ但シ雖ノ民ヲツカフ  
ニハ著ヲトラ子バナラヌヲナルベシ無知ノ民  
ヲ治ル器ユエニ後世ハ筮師ガ人ヲロクナリテ  
惑ヲトカズ惑セルガ多シ夫ユエ儒者ガセライ  
ヤシムレト日者キモ亦識見アリテ隱井ル云ノ  
有下思ハル箇ノ話アリ或ト者ガ一儒生ノ手理  
ヲ見テ是下ハ蓋シ儒者デアラフトイフ生吃驚  
ソイカナル理ニテ知ト問タレバ他ナシ田舎ノ  
豪家ヲヒキ倒ス理ガ有トイヒシト云フ十六

蓮中  
俗ニ社ヲ結ブヲ連トイフ、人々相連ナリカヨ合  
セテ事ヲナス意ナルベシ、獲人ノ贈モノ、開帳佛  
ノ奉納モノナシト皆ソノ表識ヲナレテ、是負連  
中トイフガ常例ナリ、然ルニ或ル開帳ノ標記ニ  
蓮中書タアリケレバ予オモヘラク、是ハ不文  
ナル者ガ、連蓮ヲ一様ニ思テ誤シナラント、捧腹  
セシカ、其後金聖嘆ガ念佛三昧ヲ讀ニ、云々一  
華一世尊算數譬喩ノ能ク及ブ所ニ非ズ、蓮花ト  
ハ相連ルノ義ヲ取テ、蓮ト云ナリトアリ、然レバ

連ヲ蓮トナシタルハ却テ心アリテ書セシカ  
已レ見ル所スクナクシテ他人朝リ笑フ此夕  
クヒノ事世ニオホカルベシ戒ムヘキナリ  
蘭丸三成  
人ヲ觀コト大切ナルナリ人君タル者殊ニ  
カリ石田三成カ幻ニテ三碗ノ茶ヲ加減シテ秀  
吉公ニスソシテ森ノ蘭丸カ極シテ信長公  
刺刀室ノ數ヲカゾヘ置シテカクサニル其  
善惡コレニテ既ニ了然タリ秀吉ナシテ三成  
ヲ寵セラシシヤ織田氏亡ビズンハ蘭丸ハ柱石

ノ臣トナルハク三成志ヲ得公豊臣氏ニ臣事ス  
ル者ニハ非ルベシ  
五雜俎ニ金陵ノ人大士ノ像ヲオキテ藥ヲウル  
病人クスリヲ乞フ藥ヲ以テ大士ノ手ニ上ス手  
ニ著セラルアリ著マラザルアリ著ル藥ヲ以テ授  
ク日ニ千錢ヲ得タリ少年其術ヲ得シ思ヒ  
先シモテ誘テ酒樓ニノボリ酒ヲ飲スル四五  
回イツモ錢ヲ清ハズ其人アヤシク其法ヲ叩  
ク少年ワラツテ此ハ小術ノモ君ノ術ト更易セ

浄土宗卷一  
二十一

二 賣藥師イフ我術ハ他ナシ大士ノ手ハ磁石ニ  
テ藥ニ鐵屑ノ有ト無トノ別アルノミ少年イフ  
我術モ亦外ナシ預メ錢ヲ投オキテ飲ナリト彼  
此笑テ別ルト云都會ノ地ハ漢モ和モ同シナ  
リ季世ニハ士大夫モ亦此術ヲ行フ人君タル者  
宜シク照察スベシ  
通雅ニ筒子トイフモノ此方ノ手ツマツカヒノ  
類ナリ又藏撮トモイフ夏竦ガ詩ニ舞袖跳珠復  
吐丸遮藏巧便百千端主人端坐無由見會被旁人

冷眼看コソ詩ハ事ニ感ズルヲアツテ作りシナ  
ラシ貴人が手伎ヲ招テミルニ公ヤ夫人ヤ小姐  
ハ正面ニ居テ觀ルユエ手ツマノ種ハ認ガタ  
旁ヨリエル家人等ノ目ニハヲリク種ガエユル  
モノナリ人ニ君タル者ノ姦臣ニ罔サレ其夕子  
ニ目ノツカヌハ之ニ同シ戒ムベシ  
東坡詩林ニ都下ニ一道入アリ諸ノ禁方ヲウル  
皆ソノ上ヲ封ゾ題アリ其中ニ賭錢不輸ノ方ト  
云ガアリ一少年大ニ喜ビ千金ヲ以テ之ヲ買ヒ

淨軒詩話卷  
二十三

家ニ歸テ緘ヲ發キミレバ其方ニ曰但止之而已  
トアリ是道人戯語ノ千金ヲ得タルナレド其實  
ハ少年ヲ欺ザリレ世ニ博ホド惡キモノハナク  
孟子ニ博奕ノ父母ノ養ヲカヘリミズ一ノ不孝  
ナリト有カタバ養ノミナラズ親ノ絶命ニモア  
ハ又ハ賭博ナリ或ル國ノ執政博奕ノ流行スル  
ヲ患ヘ令ヲ下メ今ヨリ以後博ヲ輸タル者アラ  
バ上ヨリ其負タル金ヲ償ヒ還シヤルベシト有  
シカバ負タル輩サツソク訴ヘ出タリ執政スナ  
ハチ勝タル者ヲ召イダシ其贏タル金ヲ輸タル

者へ反サセタリ然リレヨリ漸ク博スル者少ナ  
リレトイフ都會ニテハ行ヒガタキヲナレドモ  
一郷一村ニ用ヒバ良策ト云ベシ  
雲氣  
今来運氣ヲ候フコト流行ス一年ノ晴雨ヲ逆メ  
レルシ著ス者アリ善アタルトテ世人争ヒ買ス  
予コレヲ聞テ謂ラク一年ヤ二年ハ中ルトモ長  
キウチニハ中テ又ガ多カルベシト言レガ果メ  
オヒクアタラヌトキケリ左傳ニ鄭ノ禘窟ガ火  
災ノアルヲ二度アテタリレガ三度メハチ

ガフタリシテ見テ、天地ノ變ノ測ガタキハ、古今  
同シクナリ、但シ左傳ニ雲物ヲ紀ストアリテ、雲  
氣ヲ觀テ年ノ災ヲ察シ、豫メ備ヲナスコトアルモ、  
此ハオホヨソノ心得ナリ、如何又正月ハ雨フリ  
二月ハ晴、朔日ハ風ガフキ二日ハ陰ルナンド、詳  
ニ知ルコトヲ得ンヤ、且ツ雲氣ガヨク計モ、災ニ備  
ズンバ有ルベカラズ、國ヲ治ルニハ、年ノ豊凶ニ  
拘ラズ、五穀ヲ蓄ルガ道ナリ、身ヲ養フニハ、邪氣  
ニアタラバ、早ク藥ヲ飲ガ道ナリ、陰タル天ナラ  
バ、傘ヲ持テ出ルガ道ナリ、運氣ヲ見ルコト軍中ニ

ハ用アリ、平生ハ無用ノコトナリ、

飢饉

運氣候ヲ争ヒ買ハ、何ノ為ナリト不審シガ、或ハ  
聞ク大槩ハ米ヲウリカヒスル、慾心ノ為ナルヨ  
ク、嗚呼慾心ノカギリナキ、一身ノ利ノ為ニ天下  
ノ飢饉ヲ望ムニ至ル、天誅オソルベシ、凶荒ホド  
憐ナルコトハナシ、己未丙申ノ二耗ニ、百姓ノ餓死  
幾萬ナルヲ知ストイフ、吾輩無用ノ者ハ、都會ニ  
住スルヲ以テ、幸ニ餓ヲ免カシ、國家ニ用アル農  
民ニテモ、僻隅ニ住ルモノハ、溝壑ニ轉死ス、誠ニ

惜ムベク憐ムベシ、奥州ノ民ハ葛ノ根ヤ蕨ノ莖  
ヤ、松ノ皮マデ食フニ至リシト云、葛蕨モ直ニハ  
食レズ、種々ニ製法ノヤウクニ飢ヲ支フルナ  
リトゾ、飢歳ニツイテ哀シク笑シキ話アリ或人  
云、凶歳ノ幽霊ハ平生ト異ナリ、常ノ幽霊ノ垂ル  
手ハ掌ガ下ニ向キ、荒年ノ幽鬼ノ掌ハ上ニ向ス、  
何如ナレバ飢タル者ガ手ヲサシ伸テ、何ゾ食物  
ヲクダサレト言ツ、遂ニ死タルガ多ケレバ也  
ト、笑シクモ亦憐ムベシ、今ノ民ハ蕨ヲ食テ飢ヲ  
免カル、昔ノ伯夷叔齊ハ、蕨ヲ食テ餓死セシ

トハ、蕨ノ製法ヲ知ズ、餓ニアタリテ死セシカト  
思ハル、伯夷叔齊ハ、舊惡ヲ念ハズトハ、此所以ナ  
リヤヲカレ、  
況ガ我ヲ食ヲ數々見タリ、我モ多ク食バ飢ヲ  
支フヘシ、席上腐談ニ、虱ハ陰物ニメ、其足六北  
坎水ノ數ナリ、行トキハ必ス首ヲ北ニス、是ヲ驗  
ニ果メ然リトアリ予モ驗シガ實ニレカリ、胎中  
ナンドニテハ、盤針ノカハリニナルベシ、且ツ其  
性沈實、ハガレキヤ子ヨリモ愛スベク又花ニ



其ノ名モアリテ、風雅ナル者ト云ベシ、但シ風  
ハモ猶用アレバ、人間ニ棄テハナキヲ推シルニ  
シ、  
風俗ノ異ナル、我國ノ人ハ卑賤ノ者ニテモ、身ニ  
虱ヲ生スルヲ甚ダ羞ルガ、漢人ハ然ラズ、墨客  
揮犀ニ、王荆公朝ニ入ル、虱ヒゲノ上ニヨル、天子  
カヘリニテ笑フ、已ニ退久、王禹玉戯テ曰、レバク  
相ノ鬚ニ游ブ、曾テ御覽ヲ經ルトアリ、王莽ガ虱  
ヲ捫レ、ハモトヨリ人ノ知ル所ナリ、天子モ亦  
虱ヲ知ル、知ズンバ豈笑シヤ、

潜確類書ニ、虱一名丹、鴻談苑ニ、虱不南行、陰類也  
商陽雜俎ニ、病者ノ虱ヲ、牀前ニ取テ、病ヲウラナ  
フベシ、瘡ニトスレバ、虱病者ニ向ヒ、背ケバ死ニ  
邵氏録ニ、呂晉伯云、虱ヲ除ク法ハ、北方ノ氣ヲ吸  
筆端ニ噴カケ、欽、澹淵、默、漆ノ五字ヲ書メ、之ヲ牀  
帳ノ間ニオク、南楚新聞ニ、唐ノ司空李蟻ハ、シメ  
ノ名ハ虱トイフ、起舉ノ秋夕マク、自ラ名ヲ屋壁  
ニ題ス、明日忽チ名ノ上ニ一畫ヲ添ルヲ觀ル、乃  
虱ノ字トナル、蟻曰、虱ハ蟻ナリ、遂ニ名ヲ蟻ト改  
ム、明年果シテ第ニ登ル、清異志ニ、揚州ノ蘇隱ナル

清異志卷一  
二十一

者夜臥ス被下ニ、數人ヒトシク阿房宮ノ賦ヲヨ  
ムヲ聞久聲急ニノ小ナリ急ニ被ヲ開テ之ヲ視  
ルニ他物ナシ、夕ニ蠶十餘ヲ得夕リ、其大サ豆ノ  
如シ、之ヲ殺メ即チ止ム或人イフ、百部根ヲ糞テ  
其汁ヲ繅衣ニヒ夕セバ、虱ヲ生セズト予嘗テ驗  
シニ果メシカリ、  
志林ニ、東坡衆ト共ニ養生ノ一ヲ論シ、欲ヲ去ガ  
第一也ト下言ニツイテ張氏規ガ曰、漢ノ蘇武ガ夷  
狄ニ囚ハレシ時雪ヲカニ嚙テ飢ヲ忍ビ、背

ヲ踏レテ血ヲ出スモ、猶屈セザリシガ、其後夷ニ  
居ル間、胡婦ニ依テ一子ヲ舉タリ、蘇武ニメ海上  
ニ窮居スルモ、猶色欲ヲ除ク一アタハズ、況ヤ洞  
房綺跡ノ下ヲヤ、欲ノ消除シガタキ一知ベシ、衆  
ニナ笑フ、東坡ハ甚ダ其言ノ理アルニ感心ス止  
嗚呼古人ガ色欲ハ性ヲ伐ル斧トイヘル如ク、猛  
ク戒ムニキ一ナリ但シ人ノ生質ニ強弱アレバ  
一槩ニハ論ジガタケレトモ、諺ニ云、秋一無冬春  
ニ夏六ハ、戲言ナレドモ金言ナリ、果メ此ヲ守ラ  
バ性ヲキルニ至ラザルベシ、某ノ州ニ百歳餘ノ

翁アリ、國主召テ月俸ヲ賜ヒシトキ、種々養生ノ  
法ヲ問ハル、之、房事ハ幾年ホド用ヒガルヤト  
アリシニ、翁コタヘテ、己ニ三十年モ不淫ナリト  
マウス、國主サモアルベシトテ、却テ其年數ヲ計  
ヘラレシニ、翁ガ三十年前ハ、己八十餘ナリケレ  
バ國主大ニ失笑セラシシト云、是ソノ強弱ニ依  
ル所ナリ、原来ツヨキ生レナラデハ壽ハ得ガタ  
シ、蘇武モ囚ハレノ身ノ艱苦中ニ、子ヲ舉ルホド  
ナレバコソ遂ニ漢ニ歸ルヲ得タルナルベシ  
自巳ノ強弱ハ、自巳ノ知ル所ナレバ、自ハカツテ

慎ムベシ、  
髮亦潤シ、  
癸辛雜識ニ、醫家ノ論ニ人ノ鬚眉髮ハ、云ナ毛類

ニ、主トスル所ハ五藏方ノ異ナリ、故ニ老テ  
鬚白キモ、髮白カラザルモ、藏氣ノ偏ナル所アル  
故ナリ、大率髮ハ心氣ニ屬メ、火氣ノ如シ、故ニ上  
生ス、鬚ハ腎氣ニ屬メ、水氣ノ如シ、故ニ下生ス、眉  
ハ肝ニ屬ス、故ニ側生ス、男子ハ腎氣外行ス、上ツ  
テ鬚トナリ、下ツテ勢トナル、故ニ女子奄官等  
ハ、眉髮ハ男子ニ異ナラザレドモ、陰莖ナキ故ニ

鬚ナシ、是沈存中ガ記スル所、予老來鬚ヲ掀ス、毎  
 ニ拔ヤスシ、疑ラクハ腎氣衰乏ノ然ラシムルナ  
 ラン云迄、按ニ果ノ此説ノ如クナラバ、鬚方ホキ  
 人ハ、腎氣ソヨキ人ナルベキカ、女子ハ必ズ鬚ナ  
 キトトナセドモ、五色線ニ、士人アリ、新羅國ノ使  
 ニ隨テ一處ニ至ル、長鬚國ト号ス、國王其士ヲ拜  
 メ、駟馬トナス、士人其姬嬪ヲ見ルニ、悉ク鬚アリ、  
 乃チ詩ヲ賦メ曰、花ニ葉無ケレバ、妍カラズ、女ニ  
 鬚ナケレバ亦醜シ云々、王笑テ曰、東床ハ情ヲ小  
 女ノ頤頰間ニ忘ル、ト能ザルカ云迄、此ヲ以テ

云シバ、天地ノ大ナル、我ガ見ル所ニ限テ、此理此  
 事必ズ無シト謂ベカラザルナリ、雞肋ニ、唐ノ李  
 光弼ガ母ノ鬚數十本アリ、長卅五寸ばかり、韓國  
 夫人ニ封セラシ、是マタ異ト云ベシ、  
 自鳴鐘  
 擔曝雜記ニ、傳文忠公ツ子ニ佳キ鐘表ヲ身ニ懸  
 ケ、且ツ從者ニ至ルマデ、皆鐘表ヲ佩シム、因テ常  
 ニ時刻ヲ失ハザリシガ、一日天子スデニ出御ア  
 リテ、後チ時刻オクシテ大ニ畏イリシト云、思ニ  
 物ヲタノムハ、心ヲタノムニシカズ、人ヲタノム

ハ、巳ヲ恃ムニシカズ、時規ヲアテニスルハ、時刻  
ヲアテニスルニ如ズ、卯牌ニ出ル後ムキナラバ  
寅牌半ニ出ルガヨシ、辰刻ヲ期セバ、卯ノ半刻ニ  
ユクベシ、萬事アラカシメ、用意メ、マチガヒハ無  
モノナリ、我曹ヨリ云レバ、值夕カキ鐘表ナド買  
フハ、無用ナリニ思ハル士大夫ハ武器文籍ヲカ  
ヒ、農民ハ耒ヤ鋤ヲカフベシ、佩鳴鐘ナンドハ、殊  
ニ無益ナルモノ、鳴鐘ハ一躰、橋メキテ不雅ナル  
モノナリ

俳句

古人ノ樽ヒ口ヒノ句ハ、淵明ガ彼玉人ノ子ナリ  
ノ語ニ本ヅキ、名月ヤ居サケ飲シノ句ハ、黃公ガ  
光景ヲ含メリ、發句モ古人ノ多ク感ニ堪ルア  
リ、今ノ世ハ俳家ノヤウナル、不學ナルコトナキ  
ト云、頃者アル宗匠ガ、一聲ハ月ガ啼タカ子規  
ノ句ハ子規ナキツル方ヲナガムシバ、人歌ノ上  
ニ出タリト云、其道ヲ自慢セシアリ、是甚タ笑フ  
ベシ、後徳公ノ歌ハ、蜀魂ヲ詠セシニハアラズ、春  
夏ノ交コトニ短キ夜ノ別ヲヲレシ、歸ルニシカ  
ストサケブ杜鵑ノスクル空ヲナガムルニ、其人

ハ歸リモセテ只曉ノ月ノニ殘リシトイフ、戀歌  
ノ情況俳句トナラベ論ズベキニハ非ザルナリ、  
俳諧ハ原連歌ヨリ出テ別ニ俳調ヲナス、ナホ歌  
ニモ詩ニモ皆俳體アルガゴトシ、古今集ニ俳諧  
歌ヲ收メ、杜氏ノ詩集ニ戲ニ俳諧歌ヲ作テ悶ヲ  
ヤル是ナリ、連歌ハ詩ノ聯句ヨリ出テ其名ハ始  
テ、白河帝ノ時ニ見ユト云、永正天文ノ間前ニ  
宗鑑アリ後ニ守武アリ、並ニ連歌ヲ善メ、兼テ俳  
躰ヲナセリ、是ニ人ヲ俳句ノ祖トナス、嗣後寛  
永年中ニ松永貞徳ナル者始テ宗匠ノ命ヲ蒙リ

次テ昌琢宗因アツテ後ニ芭蕉イツ、此ヨリ風調  
一變、其道大ニ行ハル、ヨシ、後ノ俳人芭蕉ノ  
調ヲ正風トナシテ尊ヒ倣フ、世ノ知ル所ナリ、獨  
當歸子ノ井蛙論ニ云、芭蕉初ノ半セト稱シ、松尾  
氏ナリ、一旦感ズル所アリテ、祿ヲ棄テ塵ヲ謝シ  
西行ノ風ヲ慕ヒ、宗祇ノ迹ヲ追ヒ、雲ニ栖ニ水ニ  
泊シ、行脚ノ途ニ老タリ、故ヲ以テ其ツクル所、閑  
適、幽妙ノ辭オホク、諧謔調弄ノ句少シ、是芭蕉ノ  
芭蕉タル所以、ソノ人ヲ以テ然ルナリ、後ノナス  
者察セズ、閑幽ナルヲ俳體ト誤リ解シ、世ニ一人

詩軒新編 卷一  
三十一

滑替ニメ俳諧ナルヲ知モノ無シ云々按スル  
ニ、奇ニメ俳ナリ、正ニメ俳トハ言ベカラズ當歸  
子ノ論極メテ是ナリ、然シドモ思无邪ガ詩歌連  
俳ノ極致ナリ、何ゾ必ズ其末ヲ論ゼン、且ツ芭蕉  
ハ思元邪人ナリ、品格キバメテ高シ、俳人宜ク其  
風ヲ學ンデ可ナリ、句ノ正俳ナシゾ論ゼン、  
小便無用ト云札ガアシバ、誰モ其所ヲ避レドモ  
通技無用トシルセル札ガアシバ、誰モ此所ハ通  
又クノナルコト思フ、無用ノ字面ハ同ケレドモ

避ルト穿ノ逕庭アリ、虚無僧ガ門ニ立ヲ謝ルニ  
ハ御無用トイヒ、出家ノ抄化ヲ乞ニハ通ラシヤ  
シトイ又謝ルコト同ケレド、無用ト通ルハ差別  
アリ、是仁ト云ハ一ツナレドモ、微子ハ去リ比干  
ハ死シ、箕子ハ奴トナルト同シ様ナルモノナリ、  
酒店ノ小猴ヲ昔ハ樽ヒロヒト云レ由、今ハ呼デ  
御用トイフ、上戸ハ毎日御用アシトモ下戸ハ年  
中御無用ニテ、虚無僧ニオナシ、待ナリ、時世ワツ  
リテ樽拾ノ名ハ無ナリ、木拾ト云モノデキヌ、二  
三十年前マデハ、腐木汗材ヲ焚ク混堂ヲハ、穢シ

俳諧論 卷一  
三十一

ト人々罵リシガ、今ハ何シノ混堂ニテモ争テ木  
拾ヲイタシ汗材ヲ焚テ常トナシリ、棄タルヲ拾  
テ用フシバ、無用ヲ以テ用トナス、近來ノヨキ出  
來モノナリ、輟耕録ニ、巧者竹籬ヲ背ニシ、手ニ竹  
夾ヲ持テ、物ニヌヘバ即チ夾ヲ以テ籬中ニ投シ  
コシ、江戶ノ紙屑拾ト、從頭オナシ様ナリ、ハヤ  
英雄ハ一々ナリ、朱晦菴曰、真正大英雄ノ人ハ、却テ戰戰兢兢トシ、  
淡キニ臨ミ、薄ヲ履ム處ヨリ出キタルナリ、氣血  
巖豪カヘツテ一點モ著セザラシム云々此語マ

コトニ然リシカルニ放肆ニシテ檢束ナク輕忽ニ  
ノ顧照セズ酒ヲ使テ人ヲ罵リ、世ヲ罵リ傍若無  
人大言ヲ吐テ自ラ豪傑英雄ナリト思ヘル書生  
方ホシ誠ニ憐ムヘシ、又文章ヲ能スル者ハ、我が  
文ハ韓柳ヨリ勝タリト、詩ヲ善スル者ハ、己ガ  
詩ハ李杜ニモ優ルトト自負メ、英傑ナリト思ヘ  
ルモアリ、亦哀ムヘシ、志ヤ行ガ韓柳李杜ヨリモ  
賢レタラバ自負スルモ可ナラシカ、詩文ガ善ト  
テ、何ゾ誇ラシク何ノ英雄ナルベキ笑フベシ、朱文  
公ハ學者ノ巨擘ナリ、後學コレヲウツ者多トイ



へドモ、纒ニ其疵ヲサガスノミ、敵當スル下アタ  
 ハズ、眞ニ英雄ト云ベシ、然レドモ齊東野語ニ載  
 ル所ヲ以テ云レバ、唐仲友ヲ陥ントテ罪ヲキ妓  
 女嚴蕊ヲ獄ニツナギシ下ハ朱子ニ似ルハ又下  
 ニテ、王安石カ祖無擇ヲ疾ムニ因テ、薛希濤ヲ答  
 手殺セシト同様ナリ、故ニ情史ノ評ニ、幼芳、甚  
 ハ生テ希濤ハ死ス、晦翁ハ心、荆公ヨリ慈悲ナル  
 ニハ非ズ、道學ノ力ハ宰相ノ權ニ敵セザル故ナ  
 リト有リ、嗟コレニ由テセテ觀バ、朱子モナホ眞  
 ノ英雄トハ言ガタクレテ、幼芳、希濤ハ生ヲステ

自誣ヲ受ズ、唐祖ニ氏ヲノ冤罪ヲ免レシム、是、女  
 中ノ英雄、男子ヲシテ愧死セシムルト謂ベシ、  
 呂伯約ノ死セシ時、朱氏嘆メ曰、子約ツヒテ許  
 多ノ鵲突道理ヲモクラシ去ル、又陸象山ガ死ヲ  
 キテ哭シテ曰、惜ムベシ告子ヲ死ナセリト云シ  
 又楊升菴駁シテ曰、評品切劇ハ、朋友ノ平日ニ在  
 テハ可ナリ、其死凶ヲキクニ至テ、惋惜ヲ加ヘズ  
 ノ、譏訕スルハ何ゾヤ、朱子ガ孔子ヲ學ブ處ハ甚  
 タソムケリ云々、果ノシカラバ、晦翁ハ不人情ノ  
 人ト云ベシ、

不人情

宋史ニ章惇カツテ蘇軾ト共ニ南山ニ游ヒ仙遊  
潭ニ抵ル潭ノ下ハ絶壁ニ臨ムヲ萬仞ナリ木ヲ  
其上ニ横ス惇スナハ千軾ヲ揖メ壁ニ書セシム  
軾オソシテ敢テ書セズ惇ハ平歩メセヲスキ索  
ヲ垂レ樹ヲ挽キ衣ヲ攝メ下リ漆墨ヲ以テ筆ヲ  
濡シ石壁ニ向ヒ蘇軾章惇キタルト大書メカヘ  
ル神彩スコシモ動カザリシ軾ソノ背ヲ拊テ曰  
君必ズ人ヲ殺サシ惇ガ曰ナンゾヤ軾ガ曰ヨク  
自ラ命ヲ判スル者ハ能ク人ヲ殺スナリ惇大ニ

笑ヒソレ畏ルベキヲ畏ルガ人情ニテ聖人ノ  
道ナリ章惇ガ不人情ヲミテ他日ソノ君子ヲ害  
セシト又東坡ハステニ察知セシナルベシ又宋  
史ニ荆公イマク用ヒテシザル時面垢トモ決メ  
洗ハズ此マク不人情ナリ然ル故ニ用ヒラレテ  
後漢天毛畏ルニ思ラズト言ニ至シリ北宋ヲ  
傾シハ安石ヤ子厚ラガ不人情ニテ聖人ノ道ニ  
ソムキシヨリ出タリ因テ思フニ賴朝公ガ義經  
ニ熱湯ヲ持セテ試シニ義經熱ヲコラヘテ色變  
ゼザリシト云フ是亦不人情ナリ賴朝ガ義經ヲ

殺ス心ハ既ニ此ノ時ニ定シナルベシ、賴朝モ亦  
 不人情ナル故ニ、醒人ノ道ニソムキ、兄弟ヲ殺戮  
 シテ遂ニ子孫ヲ絶ニ至レリ、哀ムヘシ、  
 文覺ガ義朝ノ髑髏ヲ携ヘ來テ、賴朝ニ血ヲ滴ラ  
 シ、シト云テ、實ニ義朝ノ髑髏ナリヤ、否ハ知カ  
 タキニ似タレドモ、漢土ノ書ニ此事多クニ云、南  
 史ニ、孫法宗ノ父ノ尸ヲ尋子、血ヲ以テ骨ニ漑  
 ス、如此スルヲ十餘年、臂ヨリ脛ニイタルマダ完  
 キ皮無シ、又梁ノ豫章王綜ノ母、吳淑媛ハ、モト齊

ノ東昏王ノ妃ナリ、武帝コレヲ納ル七月ニ、綜  
 ウマルハ、故ニ綜長ノ後ニ、東昏ノ子ナルヲ疑  
 井タリシニ、俗ニ生者ノ血ヲ以テ、死者ノ骨ニ滴  
 スニ、滲イレバ即チ父子タルベシト言ヲキ、テ、  
 私カニ東昏ノ墓ヲ發キ、其屍ヲ出シ、血ヲシタ、  
 ラノ試ルニ果ノ徵アリ、又唐書ニ、任少女ナル者、  
 野中ニ於テ父ノ尸ヲ求ルニ、白骨オホヒ倒レテ  
 認メガタシ、或ハイフ、汝ノ血ヲ漬サンニ、滲モノ  
 ハ父ノ鬢ナリト、少玄ツヒニ膚ヲ鏡テ之ヲコ、  
 ロムルニ、旬ヲ閱テ尸ヲ得タリコレ皆賴朝ノ話

二同シ又秦ノ孟姜ガ長城ニ往テ其夫ト范杞良  
ガ屍ヲ尋シトキ、指ヲ嚙デ血ヲ滴シ、夫ノ骨ナル  
トヲ知り、負テカヘリシト云、予按スルニ父子ハ  
モトヨリ同血ノ致ス所ニシテ然ルベシ、夫婦モ亦  
然ルハ蓋シ情ノ感ズル所ナルカ、  
婚禮ノ墨ヲリ  
聞ク上總ノ國某ノ地ニテハ、婚禮ニアフト、村人  
墨ヲ携ヘ集リ、争テ其家ニ闖入シ、新郎新婦ニ塗  
ワクルト云、今ナホ然リヤイナヤ、良堂俗砒ニ、新  
人ヲ鬧カスハ最モ惡俗ナリ、拳ヲ奮テ墨ヲ臉ニ

又ル云々抱朴子ヲ引テ晋ノ世スデニ然リトア  
リ然ラバ唐山ニテモ古キ風俗ト見ユ、彼此アヒ  
似タルアシキ俗尚ナリ、予伊豆ニ客タリシ日、挿  
苗ノ時ニ、兒女ノ泥ヲ抛テヌリアフヲ見タリ、何  
縁故ヤト思ヒ考ヘシガ、蓋シ預メ秋成ヲ祝スル  
心ヨリ起リシコトナルベシ、大學ニ土アレバ是レ  
財アリ、書經ニ土ハ爰ニ稼穡ス、ナンドアルガ如  
ク、土ホト貴キモノハ無ケレバナルベシ、左傳ニ  
文公重耳ガ、百姓ノアタヘタル土塊ヲイタバキ  
シトモ、貴キ土ヲ得テ、君トナルベキ前兆ヲ喜ビ

シナリ、

淮南子ニ、人ソノ子ヲ嫁スルアリ之ニ教テ曰、爾  
 ヲケ慎テ善ヲナス一ナカレ、子ノ曰善ヲナサズ  
 ハ不善ヲナサレカ、親ノ曰善サヘナサズ況ヤ不  
 善ヲヤトエユ是詩經ニ所謂儀モナク非モナク  
 ノ意ニ、女子ハ事ナキヲヨシトス、顔色モ亦シ  
 カリ、美シクモナク醜ク、モ無ヲヨシトセシカ  
 尤テウツクシキハ、愚ナラザレバ必ス惡ナリ、美  
 ニモ賢ナルハ稀ナルモノナリ、戒メテ顔色ノ美  
 ヲ取ルベカラズ、然ルニ世人多クハ容儀ノ美ヲ

主トスル故ニ、親ノ命ニテ迎ヘシ媳婦ヲキラヒ  
 父母ノ招キシ婿ヲイトヒ、遂ニ不孝ノ子トナル  
 者オホシ、聞ク或家ノ娘螟蛉ヲキラフテ親シマ  
 ガル故ニ、其父ムコノ為ニ妾ヲ買テアタヘタリ、  
 婿ト妾トノ睦マシキヲ見テ、娘ツヒニ妬心ヲ生  
 ジ、妾ヲ惡ク思フヨリ、漸ク婿ト親シクナリ又、父  
 コシヲ見テ、妾ニ暇ヲヤリタリト云、ア、凡ノ人  
 情ハ、親ハ子ノ愛ニ溺シ、娘ガ贅ヲキラヘバ從テ  
 之ヲ疎ズル者ナルニ、此父タル者ノ處置ハ宜シ  
 キヲ得タル良策ト謂ベシ、

此方ノ新婚ニ新女例ノ白キ絹ヲ冒ル漢モマタ  
然リト云工通典ニ東漢魏晉以來アルヒハ艱ナ  
シドモ歳ノ良吉ニアフテ嫁娶ニ急ナル時ハ紗  
穀ヲ以テ女ノ首ニカウムラシ夫氏コレヲ發久  
因テ舅姑ヲ拜シ又彙書ニ近時婦ヲメトルニ紅  
帕ヲ以テ首ヲオホフ按ズルニ温媯ガ劉氏ヲ娶  
リシ時ステニ禮ヲ交ユ女手ヲ以テ紗扇ヲ披ク  
トアルヲ以テ見レバ華燭ノ夕ベ合盃ノ初ニハ  
首ノ飾迄ヤカニ扇面ヲ用テ面ヲオホフガ晉  
ノ時代ノ禮ト云エタリ通典ニ言フ所ハ艱ナル

年ニテ首飾ヲトハハサルニ因テ絹ヲ冒リシ  
トト云ニ彙書ニ言フ所ハ白キヲ紅キニ換用フ  
ル風俗ノ變ヲ記セシナランカ  
都俗新婦ヲ迎ヘシ初ノ或ハ客分トイフ漢土ノ  
俗語ニ妻ヲ堂客トイフト略オナシ贅婚ヲ螟蛉  
ト云ハ詩經ヨリ出テ人ノ知ル所ナリ叢考ニ俗  
ニイリムコヲ布袋トナス天香樓偶得ヲ引テ言  
帖憑布ワカウシテ孫氏ノ贅トナル舅アシバ輒  
布ヲノ之ニ代ラシメヨトイフ布袋ノ訛コハニ  
本ヅク子ノ嗣トナルヲ家督トイフ本邦ニテハ

常ノ語ニハ、唐土ニテハ多クイハズ、黠朱梁紀年  
 編ニ、宗子人ナレ云々、盜賊ニノ其名ヲ飾テ曰、是  
 スナハ千家督ナリ、是人理アランヤ云々、  
 南史張彪傳ニ、妻ヲ呼テ郷里トナス、又沈休文ガ  
 詩ニ、歸家問郷里、注ニ郷里ハ妻ヲ云ナリ、此方ノ  
 俗言ニ、淫慾ヲ故郷忌シカクイハス、較似タル  
 様ニテオカシ、越後ニテハ年少キ夫婦ハ、妻ガ夫  
 ヲ呼テ兄トイフ、長歌本越後獅子ニ、兄シヤ無イ  
 モノ夫シヤモノト云辭アリ、何如ナル稱呼ノヤ  
 ウナシトモ、天地ヒラケレ初ノハ兄弟ガ夫婦ト

ナラザレバナラヌ道理ナル故、夫ヲサレテ兄ト  
 イフハ、古言ノ存セルナルベシ、漢土ニユルニ、禮  
 記ニ婚禮ヲ謝スル辭ニ、繼テ兄弟タルヲ得ズ  
 ト有バ、夫ヲ兄ト呼コト、後世ニテモ可ナルベシ、  
 朱子モ詩ノ注ニ、禮記ヲ引テ兄弟ヲ夫婦ノ稱ト  
 セリ、思フニ夫婦ハ兄弟ノ親ニヒトシキヨリノ  
 意ニ出タルナルベシ、儒者或ハ我が古ヘノ兄弟  
 ニテ夫婦トナリシヲ毀ル者アレド、兄弟ノ配  
 偶セシハ、漢モ天竺モ萬國ニナ然ルベシ、然ラ  
 ズンバ何ヲ以テ人類ヲ蕃育センヤ、漢ニテハ、周

二至テ始テ同姓ヲメトラザル禮ヲ建ツ、イヅレ  
ノ邦ニ然ルベシ、人類ニゲキ後ノ世ニ及ンデハ  
男女ノ別ヲ正スルヲ主トスレバナリ、

水滸傳 編号

近世ノ流行モノニ天種々ノ編号イヅル中ニ、文  
人ノ姓名ヲ角カノ編号ノヤウニセシアリ、其ウ  
チ水滸傳ノ百八人ニ擬ヘタルモ見得タリ、頃者  
明史ヲ讀シニ、云々紹徽スナハチ民間ノ水滸傳  
ニナラフテ東林ノ一百人ヲ編シ、點將録トナシ  
テ也ヲ獻ス、忠賢ツノ名ヲ按メ點汰セリ、嗚呼、紹

徽ガ編号ハ、利ヲ得シテ不覺ナルベク、此方ノ板  
附ノ利ハ、數金ニ出ザルベシ、是、莊周ガ所謂、不龜  
手ノ藥ノヌリテ軍ニ勝チ、地ヲ裂テ封セラル、  
モアリ、年中統ヲ併、滸メ衣食スルモアリ、處置ノ  
巧拙ニヨルトイヘドモ、畢竟ハ命ノアル所ナリ、  
居士ガ此著モ編号ト同シク、統ヲアラフニ似タ  
リ、大方ノ君子コレヲ憐メ、



...大...  
...士...  
...中...  
...年...  
...所...  
...年...

